



子どもの予防接種 ～新しくなったポイントについて～

はじめに

世界の医学の潮流の一つは、“ワクチンで防げる病気”を未然に防ぐことです。しかし先進国の中で“ワクチンで防げる病気”による健康被害が一番多い国が日本です。例えば、04年度の調査では、水痘は25万人、おたふくは13万人、そして麻疹が大流行した01年度における麻疹患者は26万人であったと推定されています。ご両親は、子ども達の健康を守るために、日常生活で様々な工夫をされていると思いますが、ワクチンもその一つで、感染による病気の発症や、重症化から守ってくれます。病気にかかってから治療するより、予防するほうが、個人的にも社会的にも遥かに少ない負担です。近年、予防接種制度の遅れも批判を浴びており、厚生労働省は新しい対策を打ち出していますので、変更点について簡単に紹介します。



麻疹-風疹混合ワクチン

麻疹は昔から“命定め”と言われ、感染力は非常に強く、また根本治療がないのは今も同じで、患者の3割は入院し、稀に肺炎や脳炎を併発することがあります。1回の接種では免疫がつかない人が5%あること、また5〜10年で免疫が弱まっていくことから、06年より麻疹-風疹混合ワクチン(MR)として、第1期(1歳)、第2期(就学前の1年間)の2回接種となりました。07年に10〜20代を中心に首都圏で麻疹が流行し、それはワクチン未接種や、1回接種後に効力が下がっていることが原因でした。そこでワクチン効力低下が見られる年代には、12年までの期限付きで、第3期(中学1年生)、第4期(高校3年生)の接種を推奨しています。

日本脳炎ワクチン

日本脳炎ウイルスをもつ豚の血を吸った蚊に刺されて感染し、脳炎を発症するのは100〜1000人に1人とされ、60年代には2000人以上発症した年もあり、76年から日本脳炎ワクチンの定期接種が始まりました。その後、患者数は激減し、00〜06年の発症者は成人のみ41人で、9割以上が西日本に偏在していました。しかし05年に、中学生がワクチン接種後に脳の後遺症(急性散在性脳脊髄炎)を起こしたことを受け、厚生労働省は副作用の可能性があると、「接種の積極的な勧奨はしない」と勧告し、事実上の中止となりました。厚生労働省はマウス脳を用いたワクチン製造に替えて、より安全な培養細胞を利用して日本脳炎ウイルスを増殖させる方法の開発に着手しましたが、予想外に時間がかかり、ようやく09年に新しい日本脳炎ワクチンが承認され、定期接種として再開されました。ほぼ4年間の事実上の中断期間が続いたので、定期接種年齢内での接種回数不足、接種間隔超過あるいは未接種者の増加により、6歳以下の子どものお大半は日本脳炎ウイルスに対する免疫を持たないこととなります。06年に熊本県で3歳児が日本脳炎を発症し、15年ぶりに5歳以下の発症が確認されています。再開となった新しい日本脳炎ワクチンの接種スケジュール(1期および2期は再開しますが、3期は中止)について、解りにくい点も多いとしますので、市保健予防課あるいはかかりつけ医にお問い合わせ下さい。

ヒブ(Hib)ワクチン

ヒブ(Hib)とはインフルエンザ菌b型の略称です。ヒブ感染は5歳以下の子どもに多く、まれに髄膜炎、敗血症あるいは肺炎を引き起こします。特にヒブ髄膜炎は初期症状が風邪に似ているので、早期診断が非

桜の開花が待ち遠しいこのごろですが、今回の特集は、高齢化社会のなか近年その認識が重要視されている「認知症」と、最近新たな動きがあった「子どもの予防接種」です。認知症とはどのような病気がかを知り、早期発見や予防法、そして介護の際のコツなど少しでも参考になれば幸いです。また子どもの予防接種については、日本でも最近始まった新しい予防接種を知っていただき、皆様のお役に立てればと思います。

常に難しく、しかも急速に重症化する乳幼児期の怖い感染症です。98年には、WHOが乳幼児への定期接種を推奨する声明を出し、現在では100カ国以上で接種されており、先進国で未承認なのは日本だけになっていました。日本では、年間約600人の乳幼児がヒブ髄膜炎を起こし、うち25人が亡くなり、125人に重い後遺症が残るとされています。08年にはようやく日本国内でヒブワクチンが承認され、接種が可能になりましたが、未だ任意接種であるため、ご両親の費用負担は重く、計4回の接種が必要で3万円程度かかります。ワクチンの供給量が不足しており、現在のところ予約待ちの状況です(平成22年1月現在)。標準的な接種時期は、「生後2〜7ヶ月未満」に4〜8週間の間隔で3回接種し、約1年後に1回追加します。7ヶ月未満までは、同じ時期に、3回接種が必要な3種混合ワクチンと同じ日に接種しても大丈夫です。

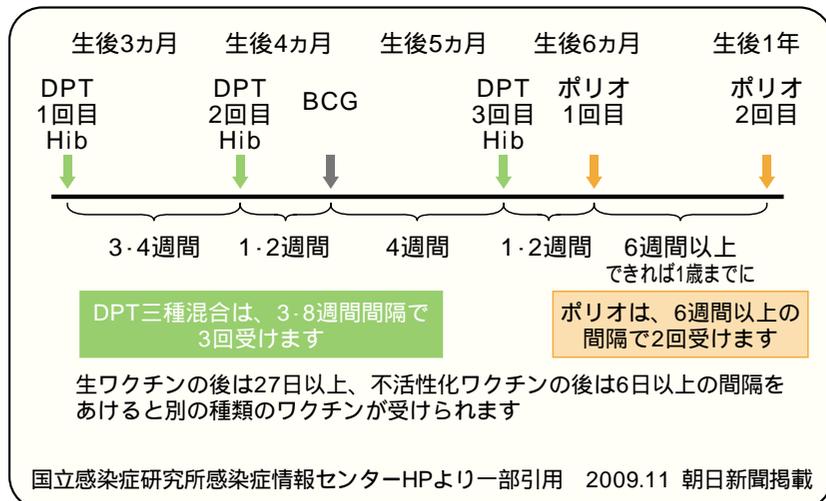
肺炎球菌ワクチン

肺炎球菌は乳幼児を中心に、肺炎、髄膜炎、中耳炎、敗血症、などを引き起こします。やはり怖いのは髄膜炎で、発症頻度はヒブ感染症よりも低いものの、早期診断は難しく、また耐性菌も急増していることが、治療を困難にしています。肺炎球菌は糖のカプセル(莢膜)に覆われていて、この部分の構造的な違いから90種類(血清型)以上に分類され、今回導入される小児向けのワクチンは7つのタイプの肺炎球菌から子ども達を守ってくれます。09年10月に承認され、今年の春ごろには接種が始まる予定です。接種年齢は「生後2ヶ月から」で、ヒブワクチンと同様に、2ヶ月おきに3回、初回から1年後に1回、計4回接種します。肺炎球菌ワクチンも、米国を初めとして84カ国で承認されており、すでに定期接種となっている国も多いのですが、残念ながら日本では任意接種で、有料となります。

おわりに

赤ちゃんの免疫力は弱く、胎盤から移行したお母さんの抗体や母乳由来の抗体によって守られていますが、やはりこの時期に様々な感染症にかかります。まさに乳幼児は“ワクチンで防げる病気”から予防接種により、守ってあげなければなりません。1歳までに受けなければならない予防接種は多いので、解らないこと、あるいは心配なことがあれば、遠慮しないで市保健予防課あるいはかかりつけ医に相談しましょう。

予防接種スケジュールのたて方の1例



(相模原市医師会 小口弘毅)